

【三】経済学の方法 (1)

・(p293) 我々が与えられた一国を経済学的に考察する場合には、我々はその国の人口、その人口の諸階級への分布、都市、農村、海洋、種々の生産部門、輸出入、年々の生産と消費、商品価格、等々から始める。実在的で具体的なもの、現実的前提をなすものから始めること、従って、例えば経済学では、社会的生産行為全体の基礎であり主体である人口から始めることが、正しい事のように思われる。

・(p293) しかし、もっと詳しく考察すれば、これは間違いだという事がわかる。人口は、例えば、それを構成する諸階級を無視すれば、1つの抽象である。この諸階級というものも、諸階級の基礎になっている諸要素、例えば賃労働、資本、等々を知らなければ、やはり一つの空語である。賃労働、資本、等々は、交換、分業、価格、等々を前提する。例えば資本は、賃労働がなければ、価値、貨幣、価格、等々がなければ、なにものでもない。

・(p293) だから、もし私が人口から始めるとすれば、それは、全体についての一つの混沌とした表象であろう。そして、もっと詳しく規定する事によって、私は分析的にだんだんもっと簡単な概念に考えついてゆくであろう。表象された具体的なものから、だんだん希薄になる抽象的なものに進んでいって、ついには最も簡単な諸規定に到達するであろう。(下向法)

・(p293) そこで今度は、そこから再び後戻りの旅を始めて、最後には再び人口に到達するであろう。といっても、今度は、一つの全体についての混沌とした表象としての人口にではなくて、多くの規定と関係とを含む一つの豊かな総体としての人口に到達するであろう。(上向法)

・(p294) 第一の道(下向法)は、経済学がその成立に際して歴史的にたどってきた道である。例えば 17 世紀の経済学者たちは、いつでも、生きている全体から、即ち、人口、国民、国家、いくつかの国家、等々から、始めている。しかし、彼らは、いつでも、分析によっていくつかの規定的な抽象的な一般的な関係、例えば分業や貨幣や価値などを見つけ出す事に終わっている。

・(p294) これらの個々の契機が多かれ少なかれ固定され抽象されると、(今度は)労働や分業や欲望や交換価値のような簡単なものから国家や諸国民間の交換や世界市場にまで上ってゆく経済学の諸体系が始まった。この後の方のやり方(上向法)が、明らかに、科学的に正しい方法である。

・(p294) 具体的なものが具体的であるのは、それが多くの規定の総括だからであり、従って多様なものの統一だからである。それ故、具体的なものは、それが現実の出発点であり、従って又、直感や表象の出発点であるにも関わらず、思考では総括の過程として、結果として現れ、出発点としては現れないのである。第一の道(下向法)では、充実した表象が蒸発させられて抽象的な規定にされた。第二の道(上向法)では、抽象的な諸規定が、思考の道を通して、具体的なものの再生産になってゆく。

・(p294) それ故、ヘーゲルは、実在的なものを、自分のうちに自分を総括し自分のうちに沈潜し自分自身から運動する思考の結果として捉えるという幻想に陥ったのであるが、しかし、抽象的なものから具体的なものに上ってゆくという方法(上向法)は、ただ、具体的なものを我がものとし、それを一つの精神的に具体的なものとして再生産するという思考の為の仕方

しかないのである。しかし、それは、決して具体的なもののそのものの成立過程ではない。

・(p294) 例えば最も簡単な経済学的範疇、例えば交換価値は、人口を、即ち、一定の諸関係の中で生産をしている人口を、前提する。又、ある種類の家族とか共同体とか国家とかをも前提する。交換価値は、一つの既に与えられている具体的な生きている全体の抽象的な**一面的な**関係としてより他には、決して存在しえないのである。これに反して、範疇としては、交換価値はノアの大洪水以前からの定在をもっている。

・(p295) それ故、意識にとっては—そして哲学的意識は、それにとっては概念する思考が現実の人間であり、従って概念された世界そのものが初めて現実的なものであるというように規定されている—、諸範疇の運動が現実の生産行為—残念ながらそれは外界から刺激だけを受けるのだが—として現れるのであり、その行為の結果が世界なのである。

・(p295) そして、このことは—とはいえこれも又同義反復ではあるが—、具体的な総体が、思考された総体としては、一つの思考された具体物としては、実際に思考の産物であり、概念作用の産物である限りでは、正しい。しかし、それは、決して、直感や表象の外又は上において思考し自分自身を生み出す概念の産物ではなく、直感や表象の概念への加工の産物である。

・(p295) 思考された全体として頭の中に現れる全体は、思考する頭の産物である。この思考する頭は、自分にとって可能なただ一つの仕方世界を我がものにするのであって、この仕方は、この世界を芸術的に、宗教的に、実践的・精神的に我がものとするのとは違った仕方なのである。(ヘーゲルの観念論的弁証法的方法の批判)

・(p295) **実在する主体**は、相変わらず頭の外でその独立性を保っている。というのは、頭がただ思弁的に、ただ理論的にのみ振る舞っている間の事であるが。それ故、**理論的方法**にあっても、主体は、社会は、前提としていつでも表象に浮かんでいなければならないのである。

・(p296) しかし、これらの簡単な範疇も、一層具体的な範疇よりも前に、やはり一つの独立な歴史的又は自然的な存在をもつのではないだろうか？それは**事と次第**による。例えば、ヘーゲルが、主体の最も簡単な法的関係としての**占有**をもって法哲学を始めているのは、正しい。しかし、それよりもずっと具体的な関係である家族や支配隷属関係以前には、占有は存在しない。これに対して、まだただ**占有するだけで所有**を持たない家族や種族的全体が存在する、と言うのは正しいであろう。(諸範疇の歴史性と論理性について)

・(p296) つまり、所有との関係で見て、より簡単な範疇は、簡単な家族共同体又は種属共同体の関係として現れるのである。それは、もっと高度な社会では、もっと発展した組織のより簡単な関係として現れる。しかし、占有をその関係とするもっと具体的な基体が、いつでも前提されているのである。

・(p296) 単独な野蛮人が占有をするという事も考える事はできる。しかし、その場合には占有は法関係ではない。占有が歴史的に家族に発展するという事は、間違いである。占有は、むしろ、常にこの「より具体的な法的範疇」を前提するのである。とはいえ、とにかく次の事だけは変わらないであろう。

・(p296) 即ち、簡単な諸範疇によって表現されている諸関係では、もっと具体的な範疇によって精神的に表現されている一層多面的な関連又は関係をまだ定立する事なしに、未発展な具体的なものが実現されている事もありうるのであるが、他方、より発展した具体的なものは、同じ範疇を従属的な関係として保持するという事である。

・(p296) 貨幣は、資本が存在する以前に、銀行が存在する以前に、賃労働その他が存在する

以前に、存在しうるし、又歴史的にも存在した。だから、この面から見れば、次のように言うことができる。より簡単な範疇は、より未発展な全体の支配的な諸関係か、又はより発展した全体の従属的な諸関係、即ち、より具体的な範疇に表現されている面に向かってこの全体が発展する以前に歴史的に既に存在していた諸関係かを表現する事ができる。その限りでは、最も簡単なものから複合的なものへと上ってゆく抽象的思考の歩みは、現実の歴史的過程に対応するであろう。

・(p297) 又他面では次のように言うことができる。非常に発展してはいても歴史的には比較的未熟な社会形態があつて、そこにはどんな貨幣も存在しないのに、経済の最高の諸形態、例えば協業や発展した分業などが見られるものがある、と。例えばペルーがそれである。スラブ人の共同体にあつても、貨幣や貨幣の生まれる為の条件である交換は、個々の共同体の内部ではまったく現れないか、又はわずかししか現れないで、むしろ共同体の境界で他の共同体との交渉で現れる。

・(p297) 実際、交換を共同体そのもののの中に本源的な構成要素として持ち込む事は、およそ間違いなのである。むしろ、交換は、当初は、1つの同じ共同体の中の諸成員の間でよりも別々の共同体の相互関係の中でのほうがより早く現れるのである。

・(p297) さらに、貨幣は、非常に早くから全面的に1つの役割を演じてはいるが、しかし古代に支配的要素としてそれが現れているのは、ただ、一面的に規定された諸国民、即ち、商業国民の場合だけである。そして、最高度に完成された古代（ギリシャやローマ）にあつてさえも、・・・近代ブルジョア社会で前提されているような貨幣の十分な発展は、ただその崩壊の時代に現れるだけである。

・(p297) つまり、このようなまったく簡単な範疇でも、それが歴史的にその内包性をもって現れる事は、社会の最も発展した状態のもとでより他にはないのである。それは、決してすべての経済関係に行きわたっていたのではない。例えばローマ帝国では、その最高の発展期にも、相変わらず現物租税や現物給付が基礎になっていた。ローマ帝国で貨幣制度が完全に発展していたのは、もともとただ軍隊だけの事だった。それが労働の全体に及んだ事も、決してなかったのである。

・(p298) このように、より簡単な範疇は、より具体的な範疇に先んじて歴史的に存在しえたとはいえ、内包的にも外延的にも十分に発展したものとしては、まさに複合的な社会形態に属しうるものであり、他方、より具体的な範疇は、より発展していない社会形態にあつてもかなり十分に発展していたのである。(p298)

以上、「経済学批判への」序説 ④ 【三】経済学の方法 (1) 2017.8.11